2018年4月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第495号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

第33回梓会出版文化賞特別賞受賞 ── ☆★☆

わが出版人生のこと

文・無明舎出版　安倍　甲

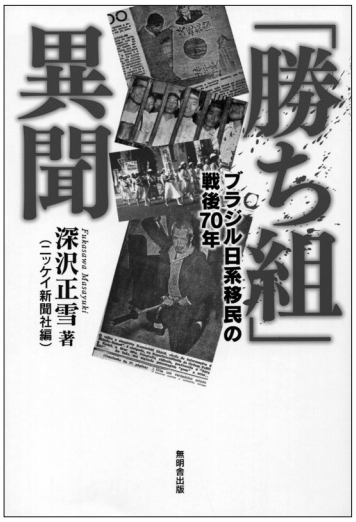
自分の立ち位置

第３３回梓会出版文化賞特別賞をいただいた。うれしかったと同時に、少しホッとしたような安堵感もある。受賞は、惰性で続いているようなわが出版人生に、ある種のピリオドを打つ役割を果たしてくれるのかもしれない。

１９７２年（昭和４７）、秋田大学の学生の身分のまま大学正門前で「古本・企画・出版　無明舎」を旗揚げした。当時は起業などという小賢しい名称はなく、単なる「ドロップアウト」とやや卑下した口調で笑われていたことを思い出す。

日がたつのは早い。もう少しで、この仕事をはじめて半世紀になる。この間、実に見事なほど「賞」なるものとは無縁だった。いや、別に賞が欲しくて仕事しているわけではないが、長く同じ仕事をしていると、自分で自分の仕事にどこかで濁点や句読点を打ちたくなる。一休みしたり、新たなことにチャレンジする隙間を見つけたり、意識的にターニング・ポイントを作る。でも、これはこれでけっこう難しい決断を必要とする。

この１０年、いつどんなタイミングで仕事を「やめるのか」「つづけるのか」「方向転換するのか」「新しい挑戦へ進むか」といった岐路に立たされた。そのたびに迷い悩み続けたのは、自分で自分のことがよくわからなかったからだ。それが受賞という「他者に評価された」ことによって、おぼろげながら「自分の立ち位置」がわかった。



【「勝ち組」異聞　ブラジル日系社会の戦後７０年】深沢　正雪著／発行：無明舎出版・2017年3月刊／四六判・276頁／ISBN978-4-89544-624-2／定価：本体1,800円（税別）

学生起業のはしり

学生時代に無明舎を立ち上げた。子供たちに勉強を教える学習塾や、当時若者たちに吹き荒れていたサブカルチャーの企画（呼び屋）をやりながら、心の中ではずっと「いつか出版をやりたい」と思っていた。ミニコミ誌の発行を続けていたのも、印刷や原稿依頼の仕方を覚えるためだった。古本屋は現金収入があり、もっとも重要な無明舎の心臓部だった。古本だけ扱うのではなく、新宿にある模索舎からミニコミ誌など最新情報を仕入れ、若者たちの溜まり場になる本屋を作りたかった。ある日、仕入れに上京した折、模索舎代表の五味正彦さんに東京の出版社の仕入れに連れて行ってもらった。その出版社は晶文社、現代書館、亜紀書房、合同出版など。今も鮮明に版元名を覚えているのは、よほどインパクトが強かったからだろう。「出版社ってこんなところで仕事をしているのか」。それは強烈で新鮮な感動だった。

この日から２年後の１９７６年、『中島のてっちゃ』という本を処女出版した。原稿依頼の方法も印刷の仕組みもよくわからなかったが、自分自身で取材、執筆し、製本も自己流の手造り本だった。今思うと奇跡のようなものだが、この秋田市の放浪芸人で知的障害を持った人物のルポは初版３千部が数日で売りきれ、増刷に次ぐ増刷で１万部ほどがあっという間にさばけた。当時の秋田市内の総戸数は５万戸ほどだから５戸に１戸は本を買ってくれた計算だ。

「出版って案外チョロいね」というのが正直な感想だった。調子に乗って「これからは出版専業でやっていこう」と決め、塾も古本屋も呼び屋もやめてしまった。逃げ場のない場所で背水の陣を敷いたつもりだった。運がよかったのは、出版社としてスタートを切ったこのころ、東京に地方小出版流通センターが発足した。このセンターの社長がミニコミ誌の取引をしていた模索舎で働いていた川上賢一さんだったのも奇遇だった。この年、社名を「無明舎」から「無明舎出版」に改組し、出版専業社として歩みだした。

津軽書房と葦書房

活字の周辺で仕事をしてみたい、という夢は案外簡単に実現した。でも身近に同業者はいない。出版を勉強するにもその環境にはなかった。かすかな希望は、お隣の青森県弘前市に津軽書房があったことだ。ここが出した長部日出雄著『津軽よされ節』が直木賞を

受賞し、飛ぶ鳥を落とす勢いの地方出版社として注目されていた。早速会いに行き、ずうずうしくも社長の高橋彰一さんに弟子入りを志願した。高橋さんは苦笑いをしながら、生意気な若造を受け入れてくれた。同じく九州・福岡でも石牟礼道子や上野英信の本を出し、山本作兵衛著『筑豊炭鉱絵巻』が話題になっていた葦書房があった。当面はこの二つの地方出版社を目標にやってみよう、やれるはずだ、と信じてのスタートだった。以後、津軽書房の高橋彰一さんから声がかかれば何を差し置いても弘前に飛び、葦書房の久本三多さんが東京に来るといえば夜行列車で会いに行った。この二人を師匠と決め、勝手に弟子を自称していた。

ゲタを作り続ける

もうあのころから半世紀近い年月が経つ。処女出版の『中島のてっちゃ』の、夢のような売れ行きは二度と経験できぬまま今に至っている（笑）。いやここまで長く続けてこられたのは、逆に「売れる本を出せなかった」からなのかもしれない。次こそはベストセラーを、と信じて、それがモチベーションとなって持続の後押しをしてくれた。

２０年ほど前から本は劇的に売れなくなった。うちだけの現象ではなく出版業界全体の問題なのだが、それが一過性の現象ではないことだけは薄々気が付いていた。

このころから、本を作っても、なんだか街から消えていく「履物屋」のゲタを作っているような気分に陥るようになっていた。ゲタって日本の文化ですよね、なくしたくないですね、と言う本人は例外なく洋服に靴を履いている。ゲタという履物の置かれた状況と、自分のつくる本の状況はよく似ている。そうか自分は現代のゲタ職人なのか。時代から取り残され、買い手の少ないゲタを作りながら、どうにかやりくりして生き延びてきた。それがほかならぬこの２０年だった。

とこころが４年前、思わぬ出来事があった。東京でフリータをしていた息子が「仕事を手伝いたい」と帰ってきたのだ。長く一緒にやってきた仲間たちも還暦を過ぎ、一人去り二人辞めしているうち無明舎出版はほぼ「ひとり出版社」という「理想の環境」に近づいていたころだ。それもつかの間、希望も未来も見えないこの仕事に、あろうことか「新入社員」を受け入れる羽目になったのである。

このデジタルでAIの時代に、少子高齢化で人口減少に歯止めのかからぬ地方都市で、自分の息子にゲタを作らせることになったのである。友人は「それって犯罪でしょう」と笑うが、日本人の多くがゲタを履く生活に回帰することは、もうありえない。でも一人でも多くのゲタ愛好家をこれから作りだすことは不可能ではない。

もう少し頑張ってみようか、と声に出さず息子に語りかけている。

受賞はバトンタッチのいいきっかけになるのかもしれない。

＊

（あんばい こう／無明舎出版舎主）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率８%）表示です。

『西南戦争　民衆の記　－大義と破壊』●長野浩典著

西南戦争といえば、西郷隆盛の人となりや大義、悲劇、戦後の権力構造にばかりに目がいきがちだが、食糧や武器の搬送、陣地構築の土木作業、野戦病院勤務、遺体埋葬作業に軍夫として動員された民衆の姿や、地域社会に与えた影響については知ることが少ない。しかし、どこの国いつの時代の戦争や紛争と同様に、そこには民衆の犠牲と人倫にもとる凄惨な現実があった。わずかな期間に福岡、熊本、大分、山口の各県から官軍に動員された軍夫は一説に実12万人（延べ1900万人）を上回り、多数が犠牲になったという。薩軍の要求に応ぜず殺害された住民も少なくない。双方からの略奪が横行、農民一揆を誘発し、コレラも流行した。一方で兵士に食糧や日用品を売るにわか商人の出現、軍事特需に沸く都市もあった。こうした戦時の異常で過酷な実態を、たくさんの資料を掘り起こし、民衆の側から追体験してみせてくれる。戦争がもたらすものは何か、痛切に実感させられる。

◆2376円・四六判・285頁・**弦書房**・福岡・2018/2刊・ISBN9784863291638

『裏鳥海の「奇蹟」　－ダムに沈みゆく山郷の履歴』●飯田辰彦著

山深くの美しい農山村が、ダム建設のため離村し、姿を消してゆくのはなぜなのだろう。美しいものとは、儚いものだからなのだろうか。　秋田県では14か所もの集落を離村させた森吉山ダムが2012年に竣工し、栗駒山麓の成瀬ダムが2024年竣工を目指して建設を進めている。さらにいま、鳥海山麓の百宅が、鳥海ダム建設のため離村しようとしている。百宅をこよなく愛する著者は、この地にあった歴史、豊かな自然、民俗知などを一冊の本として残そうと試みた。例えば、百宅の開創は、弘法大師の時代、西国からの開拓者によるものだという。また、鳥海マタギの文化は、ライフルの普及とともに様変わりしたという。村人達が時代にあわせて姿を変えながらも脈々と受け継いできた民俗知の多くは、百宅の水没とともに失われてゆくのだろう。失われゆくものほど愛おしく思えるのはなぜなのだろう。鳥海ダムは、百宅をタイムカプセルにするために建設されるのかもしれない。

◆1944円・四六判・245頁・**鉱脈社**・宮崎・2018/1刊・ISBN9784860616915

『「夏目狂セリ」 ーロンドンで何が起きたのか』●三上　命著

今から102年前の1916年12月に49歳の若さで亡くなった夏目漱石。死因は胃潰瘍で、解剖に付された遺体の腸には胃から流れ出た大量の血が詰まっていたという。漱石はなぜこんなにも苦しんだのか。1902年、イギリスに留学するが、精神的不調に苦しみ始め、ロンドンの下宿に閉じこもり、文部省には「夏目狂セリ」という電報を送ったほどだった。官費留学までしていながら英文学に共鳴できなかったことも一因と言えるが、以前から漱石には妄想や幻聴があった。精神の上昇と下降を繰り返しながら漱石は帰国するが、「坑夫」と「夢十夜」の第二夜には当時の気持ちが色濃く反映されている。講演形式を取りながらこの二作を分析し、漱石の懊悩に迫っていく。

漱石のうつは最低のところから折り返していく過程で起こるなど、ここでも並の人間とは違うことがわかる。劣等感と自己本位のはざまで矛盾を抱え、一点の汚れも許さない純白主義者だった大いなる天才の姿は強烈である。

◆1620円・四六判・165頁・**満天地**・長野・2017/11刊・ISBN9784990963323

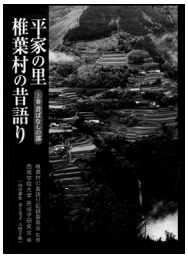
『佐竹支族宇留野氏系譜　ー秋田に下向した宇留野氏の探訪』●宇留野弘著

佐竹氏はそもそも、源義家の弟・新羅三郎義光の子孫が常陸国久慈郡佐竹郷に土着したことに始まる。一時、頼朝により所領が没収されたこともあったが、中世を通じて常陸北部を中心に勢力を張った名族である。その庶流・宇留野氏が歴史の表舞台に現われたのは16世紀前半、享禄・天文の乱（部垂十二年の乱）のときである。佐竹宗家・義篤と実弟・義元（宇留野家の養子）との権力抗争だが、果は義元側が敗れる。宇留野氏は滅亡したかに思われたが、別系統の宇留野氏が存在した。義篤の曽祖父・義俊は正妻以外二人の女性に子を産ませており、そのどちらもが宇留野氏を称した。

近世、家康により出羽国の転封を命じられた義重・義宣につき従った宇留野義長はその別系統である。近世大名・佐竹氏は一門以外に「引渡・廻座」と称する新たな家格を制定。宇留野氏はその廻座に属した。本書は系譜を駆使して中世から現代に至る歴代宇留野氏の事績を丹念に綴った労作である。

◆2160円・A5判・368頁・**秋田文化出版**・秋田・2017/11刊・ISBN9784870225800

『平家の里　椎葉村の昔語り　上巻　昔ばなしの部』●椎葉村の昔語り記録委員会編著



椎葉平家まつりや平家落人伝説で知られる宮崎県椎葉村の古老らの昔語りを方言もそのままに聞き書きした昔話集。西南学院大学民俗学研究会の学生や院生による丹念な調査と村を挙げての協力によって結晶化した。本書では昔話1話ごとに椎葉村の歴史風土に纏わる解説が付されているが、そのうちの一つに、江戸期の『西国奇談』という書物にある逸話が紹介されている。すなわち…肥後国、球磨川のほとりで、三人の樵夫が川上から流れてくる上等な杯を拾った。かつて、椎葉という平家の落人たちの隠れ里があると聞いたことがあるが、さてはこの川の上流にその村があるに違いない…こういった平家落人伝説を背景に据えてみると、狸が源平の争いを芝居してみせる『四国八島の禿狸』等、昔話のいくつかが一際興味深いものになるだろう。また『筑前琵琶の起こり』の注記では、椎葉村の狩人は日光派であり、この派は全国どの山でも狩りができ、その本拠地は栃木の二荒山神社である等と書かれている。採録された昔話も面白いが民俗学的な知識に裏打ちされたこういった解説や注記がまた抜群に面白い。

◆3240円・A5判・408頁・**鉱脈社**・宮崎・2017/11刊・ISBN9784860616793

地方小出版流通センター　ジャンル別 新刊案内

2018年2月1日～28日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込（消費税率8%）表示です。

【雑誌】

◆**あおもり草子**　No.249　佐藤　史隆編　A4　48頁　600円　企画集団ぷりずむ［青森］　978-4-503-21394-5　18/02

◆**北方風土**　第75号　北方風土社編　A5　157頁　2160円　イズミヤ出版［秋田］　978-4-503-21392-1　18/01

売行良好書　期間：2018年2月15日～3月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(2)『図書の修理とらの巻』1404円・澪標　(3)『毒毒植物図鑑』1944円・南方新社　(4)『忘却の引揚げ史』2376円・弦書房　(5)『覚醒せよ、わが身体。』1944円・ハーベスト社　(6)『ぼくはこうやって詩を書いてきた』3024円・ナナロク社　(7)『獄中閑　我、木石にあらず』2700円・ＴＡＯ　ＬＡＢ　(8)『京近江の武将群像』1620円・サンライズ出版　(9)『アカデミック・ハラスメントの解決』2160円・寿郎社　(10)『玄洋社とは何者か』2160円・弦書房　(11)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスク・ヒューマン・ケア　(12)『糖尿病は”砂糖”で治す！』1944円・鉱脈社　(13)『物語の森へ』3888円・東京子ども図書館

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『絶景本棚』2484円・本の雑誌社　(2)『昭和プロレスマガジン　４５』1000円・昭和プロレス研究室　(3)『本の雑誌　４１８号』720円・本の雑誌社　(4)『東京かわら版　３月号』500円・東京かわら版　(5)『短歌タイムカプセル』1620円・書肆侃侃房　(6)『パズル通信ニコリ　１６２』972円・ニコリ　(7)『電験３種超過去問（理論篇）平成３０年度版』864円・エコテクノ出版　(8)『ワンフェスのワンダちゃん』2500円・本の雑誌社　(9)『西南戦争　民衆の記』2376円・弦書房　(10)『精神障害とともに』1512円・ラグーナ出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『千葉県いきものかんさつガイド』1080円・たけしま出版　(2)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(3)『埼玉の城』2700円・まつやま書房　(4)『下野国が生んだ足利氏』1620円・下野新聞社　(5)『かくれキリシタンの起源』4320円・弦書房　(6)『つむじ風、ここにあります』1836円・書肆侃侃房　(7)『細川侯五代逸話集』1080円・熊本日日新聞社　(8)『もうひとつのこの世』2376円・弦書房　(9)『１９６７中国文化大革命』2700円・中国書店（集広舎）　(10)『幕末の探検家　松浦武四郎入門』1080円・月兎舎　(11)『アカデミック・ハラスメントの解決』2160円・寿郎社　(12)『会津の文人たち』2700円・歴史春秋社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

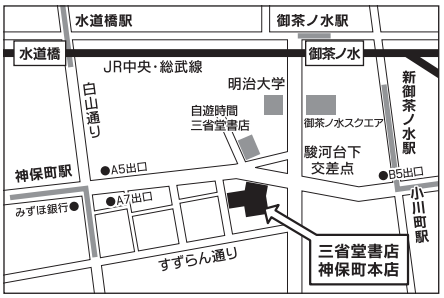
トピックス ―― ★★★

▼今年は、かつて「蝦夷地」と呼ばれていた北海道が、1869(明治2)年8月15日に太政官布告によって「北海道」と命名されてから150年となる節目だとのこと。この節目に因んで、江戸時代の終わりから明治にかけて活躍した探検家で北海道の名付け親とも言われる松浦武四郎に関する書籍、雑誌が刊行されています。**【幕末の探検家　松浦武四郎 入門】**(三重の月兎舎刊)については当センター新刊案内ブログに紹介文があり、今号のジャンル別新刊案内に転載しています。もう一つ、札幌発の自然雑誌**【faura59号】**は松浦武四郎特集となっています。

▼すぐれた新人の写真集や写真展に贈られる木村伊兵衛写真賞に今年は、藤岡亜弥さんの写真集『川はゆく』（赤々舎刊）および展示「アヤ子、形而上学的研究」が選ばれました。「7本の川が流れる街、広島。そのデルタ地帯に原爆を落とされてから、70年以上の時間が経過した。「平和」が記号化し、風俗となってゆく街。眼差されるほどに空洞化してゆく原爆ドーム。それらを背景としながら立ち現れる光景に、写真家の、スナップを撮る無意識は接続した…」（赤々舎ＨＰ【川はゆく】紹介文より。）

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。
★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店　営業のごあんない
神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。